

第3問

次の文章は、『一本菊』の一節である。兵部卿宮は、菊の宴の折、兵衛佐の家にすばらしい菊があることを聞きつけ、その菊を献上させ、その由来を尋ねる。以下の文章は、それに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

兵衛佐、申しけるは、「あれは父右大臣殿、鞍馬へ参り給ひしに、鞍馬の坊の前裁に、しんくはんもんの菊とて移し植ゑて候ひしを、わりなく請ひ取りて、家に伝へんとて植ゑ置きしを、父、はかなくなりて後、妹にて候ふ者、父が形見に見んとて惜しみ置きて候ふを、召しに従ひて参らせ候ふ」と申せば、「妹は播磨の三位の腹、帥の局か」と問はせ給へば、「さは候はず。我と同じき式部卿宮の腹にて候ふ」と申しければ、宮、思し召しけるは、「いざや、今のもてなしにて、おぼえこそなけれども、院にもこの兵衛佐に並ぶ雲客もなきものを、まして、女にてかれが妹ならば、いかにいつくしからん。」(ア) あはれ、見ばや」と、深く御心移りて、この兵部卿宮は、当帝の御腹異の御弟、よろづに御情け深く、この兵衛佐をも、常は御目をも掛けさせ給ひてあはれみ給ひける。

この君のこと、夜もすがら思ひ明かし給ひて、宮の御隨身、常磐と申して髪容貌足らひて十四、五ばかりにてよろづ物馴れたる童を召して、「あの菊の枝、折りて参れ」と仰せありければ、朝ぼらけの露のしげきに、指貫の裾を取りて、菊を手折りて参りけり。宮、同じ色なる菊重ねの薄様に、かくなん、

A 「わが心君が籬にうつろふはなほや残せる白菊の花

菊の白露は置き添ふるより苦しきものを」と遊ばし、菊の枝に結びて、「兵衛佐の妹の住むらん方の、格子に挿して帰れ」と仰せありければ、常磐、もとよりこの内の子細、よく知りたる者にて、三条高倉に行き、この姫君のおはします西の対の、中格子に挿して帰りぬ。女房たち、御格子上げんとて、立ち出で、この花を取り、「これ御覧候へ。花に添へて、なべてならぬ匂ひの薄様に、歌の書かれて候ふ、御覧ぜよ」とて、兵衛佐に、見せ参らせたりければ、見給ひて、「兵部卿宮の御手なり。こはいか

に。宮の御手にてわたらせ給ふ。^(ウ)いかにして思し召し寄りけるぞ。もとより、これこそ、あらまほしきことにてあれ。父母生きておはせば、今までかくてやおはすべき。今は、女御、^{きさき}后の位にもわたらせ給ふべきぞかし。この度、御文あるならば、御返事すめ給へ。女房たち」とぞのたまひける。また昼ほどに、宮、常磐を御使^{つかひ}にて、御文あり。

B 行き通ふ跡は知らねど逢坂^{あふさか}の関は今こそ越えまほしけれ^(注9)

「この度は、あらはれての御返事を請へ」と仰せありければ、常磐、^b賜りて、三条へ行き、西の対にて、「これは兵部卿宮の御文よ」と言へば、女房たちは、「いかに。思ひ寄らず。人違^なへか。とくとく帰り給へ」と、取り入れず。むなしく帰りぬ。押し返しかくなん、

C 紅の末摘花^{すあつはな}や我ならんふみかへさるる身こそつられ^(注10)

と遊ばして遣はさるる。常磐、取りて行き、やうやうに言へども、出でず。答へもせず。常磐、幼き心地にねたくおぼえて申すやう、^(注11)「当時、我が君の御文などをめざましくして、もてなし給ふ便なさよ。取りだに入れさせ給へ」とて、^X御簾うち上げて投げ入れぬ。されども御返事はなかりけり。その後、色々の薄様に様々の御心をくだきて、押し返し押し返し御文ひまなかりけれども、^(注12)行く水に数書く心地して、一度も御返事なかりけり。宮は、「ねたくも言ひけるものかな。よしよし、さらば、さてこそあらめ。とかく言はんほどに、母女御殿の御方へも、聞こえんこそ、恥づかしく思へ」などと思せども、忘れず、御心弱きにつけても、情けのほどあらはれて、ただ一筋に思すなり。

かくて日数も経るほどに、宮の中、静かによろづものあはれなる昼つ方、常磐、幼き心に、宮の思し召し沈み給へるを、あはれに思ひ参らせ、間近く参りて、^(注13)「やうやうさてこの御事はしらけてやませ給ふべきか。常は行きて見るに、かひがひしくとがむべき侍^{さむらい}なんども候はず。なかなか御文など候はんよりも、ただ押して入らせ給へかし。しかも今夜は兵衛佐殿、院中の御宿直^{ととのみ}、殿上に侍^はるなり。誰が車ともなく、あまた出で入り候へば、うち紛れさせ給ひて、車をば中門に忍び立てさせ給ひて、女房たち、大殿油^{おほのあぶら}などひしめき候はん紛れに、西の妻戸^(注14)の方より紛れ入らせ給ひて、灯火^{ともしひ}の白々となりて、よくよく^c御覧^みじ候

ひて、御心につかせ給ひ候はば、紛れも入らせ給へかし。宮は、さもあるべしと思し召して、^{てんじやうびと}殿上人のまねびをして、宮の中を忍び出でさせ給ひしかば、常磐、御供申しけり。

(注) 1 鞍馬——京の北方、鞍馬山にある鞍馬寺。「鞍馬の坊」は、鞍馬寺の中の僧の住まい。

2 しんくはんもんの菊——菊の品種の一つ。

3 播磨の三位の腹、帥の局——播磨の三位を母とする帥の局。「播磨の三位」と「帥の局」は、ともに天皇に仕える女房の呼称。

4 式部卿宮の腹——式部卿宮の娘を母としていること。

5 雲客——殿上人の別称。

6 いつくしからん——容姿が端正で美しいだろう。

7 菊重ねの薄縁——上が白、下が青の二枚重ねの薄い上質の紙。

8 三条高倉——京の地名。三条大路と高倉小路の交差する辺り。

9 逢坂の関——現在の滋賀県の逢坂山にあった関所。

10 末摘花——^{べにばな}紅花の異名。紅、黄紅色の花をつけることから、ここでは「紅の末摘花」で、恋心をはっきり顔色に出ることをいう。

11 当時——現在。

12 行く水に数書く——「行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」(『古今和歌集』恋一・詠み人知らず)を踏まえており、苦勞しても甲斐がないことのとえ。

13 しらけて——気持ちが冷めて。

14 妻戸——建物の四隅にある両開きの板戸。

問2 波線部 a ～ c の敬語についての説明として正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- ① a …… 兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す謙讓語
b …… 作者から常磐への敬意を示す尊敬語
c …… 常磐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
- ② a …… 兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
b …… 作者から兵部卿宮への敬意を示す謙讓語
c …… 常磐から兵衛佐の妹への敬意を示す尊敬語
- ③ a …… 兵衛佐から式部卿宮への敬意を示す謙讓語
b …… 常磐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
c …… 常磐から兵衛佐への敬意を示す尊敬語
- ④ a …… 兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語
b …… 作者から兵部卿宮への敬意を示す謙讓語
c …… 常磐から兵部卿宮への敬意を示す尊敬語
- ⑤ a …… 兵衛佐から兵部卿宮への敬意を示す謙讓語
b …… 女房たちから常磐への敬意を示す尊敬語
c …… 常磐から兵部卿宮への敬意を示す丁寧語

敬語、補助動詞の種類をカラーで示します。

敬語の並び順の優先順位は、
謙譲語・尊敬語・丁寧語

- 謙譲 補助動詞
- 尊敬 補助動詞
- 丁寧 補助動詞

bの謙譲語（間接尊敬）の
敬意の方向が理解できている
かが、問われている。

謙譲の本動詞

参らせ	参らせ	参らせ	参らせ	参らせ	参らせ
命令	已然	連体	終止	連用	未然
候へ	候へ	候ふ	候ふ	候ひ	候は
命令	已然	連体	終止	連用	未然

a

兵衛佐の会話だから、
手（兵衛佐）から、話し
聞き手（兵部卿宮）

謙譲の本動詞

賜れ	賜れ	賜る	賜る	賜り	賜ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然
				て	

b

地の文（作者の言葉）だから、
常磐の動作を描いて
話し手（作者）から、
動作の受け手（兵部卿宮）
への間接的敬意 謙譲語

尊敬の本動詞

御覧ぜよ	御覧ずれ	御覧する	御覧ず	御覧じ	御覧ぜ
命令	已然	連体	終止	連用	未然
候へ	候へ	候ふ	候ふ	候ひ	候は
命令	已然	連体	終止	連用	未然

c

常磐の会話だから、
手（常磐）から、動作をする
人（兵部卿宮）への直接敬意 尊
敬語

後半はカラーなしです。

謙譲の本動詞

せ 参 よら	す 参 れら	す 参 るら	参 ら す	参 ら せ	参 ら せ
命令	已然	連体	終止	連用	未然
丁寧の補助動詞	候へ	候へ	候ふ	候ふ	候ひ
	命令	已然	連体	終止	連用
					未然

a

謙譲の本動詞

賜 れ	賜 れ	賜 る	賜 る	賜 り	賜 ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然
				て	

常磐、

b

尊敬の本動詞

丁寧

御 覧 ぜ よ	御 覧 ず れ	御 覧 ず る	御 覧 ず	御 覧 じ	御 覧 ぜ
命令	已然	連体	終止	連用	未然
候へ	候へ	候ふ	候ふ	候ひ	候は
命令	已然	連体	終止	連用	未然
				て	

c